

通訳教育のための音声知覚研究

高橋絹子
大井川朋彦
(上智大学大学院)

本講演では、私たちが行なってきた日英の通訳訓練生とプロ通訳者の音声知覚に関する一連の研究を紹介する。これらの研究は通訳訓練を受けている訓練生にはどのような問題があり、それはどのように克服したらよいかを音声学の面から考察するものである。Takahashi (2009)では、通訳訓練生を対象に通訳実験を行い、自分の通訳について分析してもらった。その際、正しく訳せなかった理由として、音声の聴き取りができなかったというコメントが過半数の訓練生から得られた。それを検証すべく、訓練生と比較のためのプロの通訳を対象に最小対の単語の同定実験を行った。その結果、通訳の正確性と同定課題の正解数の間に相関関係は見られず、プロと訓練生の正解数の間にも有意差は見られなかった(Takahashi & Ooigawa, 2009)。更に、より難易度の高い音声知覚実験を行ってみたが、再びプロの通訳者と訓練生の正解数の間に有意差は見られなかった(Takahashi & Ooigawa, 2010)。

その一方で、通訳訓練を受けていない帰国子女に、英日の通訳を行ってもらい、その通訳を分析したところ、多少細かい部分でソーステキストとのずれがあったものの、大きく内容を逸脱したものはなく、要旨は取れていた(Takahashi, to be submitted)。そのため今度は、帰国子女のプロの通訳者とそうでないプロの通訳者を対象に、同じ音声知覚実験を行ったところ、帰国子女のプロ通訳者の方が、有意に聴き取りができていた(Ooigawa & Takahashi, 2010)。ただし、これで帰国子女の方が通訳に適していると結論づけるのは、十分ではない。TOIEC が実験に参加した帰国子女と同レベルで、なおかつ通訳訓練を受けていない帰国子女でない大学生に同じのものを訳してもらったところ、日本語の流暢さにおいては、帰国子女でない実験参加者の方が優れていた(Takahashi, to be submitted)。

現段階での教育的示唆としては、個人差もあるが、帰国子女の訓練生と帰国子女でない訓練生では抱えている問題が異なる可能性が高いので、別々に訓練するべきであるということが言える。可能ならば、訓練前にリスニングテストや通訳パフォーマンス試験を行い、個々の弱点を明確にし、それに基づいて訓練を行う必要もある。例えば、帰国子女でない訓練生は英語のリスニングに問題を抱えていることが多いので、その事実を確認し、必要ならば音声の訓練などを行うことにより、実際の効果も期待できるとともに、訓練生の自信にもつながることが期待できる。